

# 不登校経験を通じた教育と社会の再構築：路場ネモ氏の視点に基づく分析報告書

## エグゼクティブ・サマリー

本報告書は、元「不登系VTuber」であり、現在は通信制大学で教育学を専攻する路場ネモ氏の経験と洞察をまとめたものである。路場氏は、中学・高校時代に発達障害および精神障害（社会不安障害、双極性障害）によって不登校と退学を経験したが、現在は高卒認定試験を経て大学進学を果たしている。

核心となる提言は、不登校を「社会のルール（学校・労働）への復帰」という視点ではなく、個人の特性に適した\*\*「再配置（リポジショニング）」\*\*の問題として捉え直すべきであるという点にある。路場氏は、現在の学校制度が想定する「普通」の枠組みが極めて狭く、そこから外れた存在を「例外」や「遅れ」と見なす構造を批判している。本資料は、不登校当事者が抱く「将来への絶望」の実態を明らかにするとともに、既存の教育・社会通念に対する構造的な転換の必要性を提示する。

---

## 1. 路場ネモ氏の経歴と現在の状況

路場氏は、自身の不登校経験を「必然的な結果」であったと定義している。

- 経歴概要：
  - 中学校で発達障害と精神障害の影響により不登校となる。
  - 高校に進学するも1年生で退学。その後、数年間の無職期間（鬱状態）を経験。
  - 独学で高等学校卒業程度認定試験（高認）に合格。
  - 現在、通信制大学にて教育学を専攻。
- 疾患・特性の背景：
  - 発達障害（特性）、社会不安障害、双極性障害（躁鬱病）を抱える。
  - 現在も気分障害の治療を継続中であり、不登校経験とこれらの特性は地続きであると認識している。
- 活動の動機：「元不登校者のVTuberが世の中に増えたほうがいい」という信念に基づき、自身の経験を発信。不登校当事者の視点から、学校や社会の構造的な問題についてnoteやYouTubeで論考を展開している。

---

## 2. 不登校の発生機序と心理的葛藤

不登校の始まりは、個人の怠慢ではなく、身体的・精神的な「拒絶反応」として現れている。

教室における身体症状

路場氏は、教室という空間にいただけで物理的に息ができなくなる症状(社会不安障害)を経験した。あくびを装って息を吸わなければならないほどの苦痛であり、廊下や保健室ではその症状が出ないことから、同級生が密集する空間そのものが不適合の要因であった。

## 「死」に直結する論理的絶望

不登校当時の路場氏は、以下のような極めて悲観的かつ強固な論理的推論に囚われていた。

1. 中学校に行けない。
2. ゆえに、高校にも行けない。
3. ゆえに、将来労働(仕事)もできない。
4. したがって、死ぬしかない。

この「労働への不安」は、不登校長期化の過程で最も深刻な希死念慮の源泉となっていた。

## 障害の不可視性

幼稚園や小学校時代から、発達障害に起因する兆候(極端な体力のなさ等)があったにもかかわらず、教育現場で見過ごされてきた。早期に適切な指摘や支援があれば、中学校での不登校回避に繋がった可能性を指摘している。

---

## 3. 構造的視点の獲得: Twitterと批判的思考

路場氏が自己の状況を客観視し、回復に向かう過程で大きな役割を果たしたのは、ソーシャルメディアを通じた「構造的な思考」の獲得であった。

- **Twitter**での学び: フェミニズムや障害学、政治的な議論に触れることで、「個人の問題」を「構造の問題」として捉える批判的思考を習得した。
- 主観からの乖離: 尊敬する特定のインフルエンサーの影響を受け、物事を俯瞰して見る力を養った。これが、後に述べる「世界との距離を取り直す」という概念に繋がっている。
- 自己肯定感の変容: 以前は「人に迷惑をかけること」に怯えていたが、構造的視点を得たことで、過剰な自責の念から解放された。

---

## 4. 既存の社会通念に対する批判的考察

路場氏は、不登校を巡る一般的な言葉の裏に潜む「暴力性」と「偏った前提」を鋭く分析している。

### 「甘え」「逃げ」という言葉の解剖

これらの言葉は、原因のすべてを個人の資質に押し込め、環境や構造の問題を隠蔽していると指摘する。

言葉	路場氏による分析
甘え	「その場(学校)に耐えて、皆と同じ義務を果たすべき」という前提。楽をすることを許さない規範の押し付け。
逃げ	「本来あるべき場所(学校)から離脱した」という否定。義務放棄に対する後ろ指。

これらの言葉の共通点は、「その場に居続けることが正しい」という前提にある。路場氏はこの前提そのものが、当事者を「間違っただけ」に留め、精神的に破壊する要因であると主張する。

### 「普通」の相対化

路場氏は「普通」という言葉を用いる際、常に「鉤括弧」を付記する。これは、「普通」という言葉に含まれる「そうあるべき」という規範性を無批判に受け入れず、距離を置くための意図的な行為である。

## 5. 提言：回復ではなく「再配置」という概念

支援者や社会が持つべき新しい理解として、路場氏は\*\*「再配置(リポジショニング)」\*\*という考え方を提示している。

- レール復帰の否定: 不登校を「レールから外れた人をどう戻すか」という視点で捉えるべきではない。そもそもその場所(学校)に適合していない人間に、適合を強いること自体が誤りである。
- マシな場所の探索: 「どう戻すか」ではなく「どこなら壊れずにいられるか」を重視すべきである。
- 世界との距離を取り直す: 不登校期間を「エネルギー回復のための休養」と捉えるのではなく、「社会のレールを相対化し、自分と世界との距離を調整する時間」と定義する。
- 多様な居場所の重要性:
  - フリースクールだけでなく、図書館、本屋、博物館、Discordのサーバーなど、本人が「マシだ」と思える場所が複数存在することが重要である。
  - 例として、路場氏は地元の古本屋での、付かず離れずの距離感での知的なコミュニケーションが、中学生当時の自分にあれば救いになったと回想している。

## 6. 教育への「復讐」としての学び

路場氏が教育学を専攻している理由は、単なる向上心ではなく、\*\*「教育への恨みを果たすため」\*\*という極めて批判的な動機に基づいている。

- 教育の歪みの是正: 自身を「学校という制度から弾き出された例外」にした教育の歪みを、自ら教育を学ぶことで是正(解体)しようとしている。
- 例外の包摂: 学校は法律で義務付けられた公共の場所である以上、あらゆる人間を想定すべきである。「私という人間を想定していない制度」に対し、当事者の視点から臨機応変な受け入れ態勢を求める姿勢を示している。
- 「楽しさ」の承認: 「不登校」と「好きなことがある(楽しい)」は論理的に両立する。大人の前で楽しさを出すと「病気や苦しさが軽視される」と恐れ、好きなことを隠さざるを得ない当事者の心理を理解すべきであると説いている。

---

## 7. 結論

路場ネモ氏の視点は、不登校支援が陥りがちな「適応指導」という枠組みを根底から揺さぶるものである。不登校は「個人の失敗」ではなく、極めて狭い「普通」を前提とした「システムの不適合」の結果である。

社会に求められるのは、画一的な「社会のルール」への接続を強要することではなく、個々人が壊れずに存在できる「適切な配置」を複数用意し、自律的に居場所を選択できる柔軟な構造を構築することである。路場氏の歩みは、かつて「死」しか選択肢がないと信じていた状況からでも、世界を相対化し、独自の価値観で社会と再接続することが可能であることを証明している。